

お念仏と共に ～ 如来に念じられて生きていこう ～

久方ぶりの雪の報恩講でした



*三頁に「写真でたどる報恩講」があります

四月十九日から二十三日にかけて日豊教区・四日市別院の親鸞聖人七百五十回御遠忌が厳修されます。五十年に一度の大法要です。皆さんのご懇志によって美事に修復された本堂と一緒に参りいたしましょう。ところで、この御遠忌は、聞こう念仏のころー願われ、待たれている私を生きん!」というテーマで勤まります。念仏とは口に出して「南無阿弥陀仏」と称える事ですが、そのころは私は阿弥陀仏を深く信じて、謹んで帰依いたします」という慶びの声です。

目や耳で見聞きする世界は対立する世界ですね。独生・独死・独去・独来といって、結局のところ、人は独りであります。同じ夢を見ることも出来ませんし、一緒に死ぬことも出来ません。このバラバラの世界にあつて、しかもそこを一つに貫いている大いなるはたらきがあるのです。それを感得するころを信心と言います。その信心によつて目覚めた世界が阿弥陀仏であり、お浄土です。

阿弥陀仏のはたらきに目覚めた時、独生・独死・独去・独来のこの世にあつて、絶望せずに生きていける勇気が与えられます。また、生まれた者に必ずおとずれる老・病・死を安んじて受容する智慧を与えてくださります。南無阿弥陀仏を称える人には、一切衆生を受け入れられている天地の窓が開かれ、久遠の過去から遙かな未来まで貫く悠久の時間が待っていることでしょう。

南無阿弥陀仏は人生の讃歌です。

「法蔵菩薩の自証」

鍵主良敬先生

一月二十三日から二十四日の勝福寺報恩講には、京都から八十三歳になられる鍵主良敬先生がご出講くださいました。今年で三年目です。渡辺和義さんが昨年について要約してくださいました。

【「法蔵菩薩の名告り」

(二年目)

「華嚴経」や「唯識」によつて、自力・他力・無我についてお話しいただき、「他力の念仏」は、帰命することができないお前に代わつて私が帰命するといふ法蔵菩薩の名告りであると教えられました。また、「法蔵菩薩はアラヤ識である」という曾我先生(※注1)の言葉を引いて二種深信(機の深信と法の深信)についてお話しいただきました。

【「法蔵菩薩のこころ」

(二年目)

法蔵菩薩は、マナ識(エゴの心・自力のはからい)に踏んづけられながら耐え忍んで、下から一つになつて私を支えてくれている。

先生の父が吞兵衛の門徒から受けたいじめを耐え忍ぶことができたのは「如来、我となりて、我を救いたもう」といふ法蔵菩薩のこころに助けられていたからではないか。

【法蔵菩薩の自証】

最終年の今回は、「法蔵菩薩の自証」と題して、法蔵菩薩が何であるのか、それは何によつて証明できるのかという核心に迫るお話でした。以下に要約させていただきます。

「如来、我となる」とは、邪見憍慢の悪衆生である私のところへ如来様が法蔵菩薩を名告つて飛び込んで下さるんです。ではどこへ飛び込むのでしょうか？ あなたの心臓ですよ。私の心臓の真つただ中に飛び込

んで下さるといふのです。それが曾我先生の感得された「如来、我となる」といふことですね。曾我先生は、実際に経験して法蔵菩薩が私をしつかり支えてくださっていることを疑いない事実としていただけたのです。親鸞聖人のご和讃に「寝ても覚めてもへだてなく南無阿弥陀仏をとのうべし」と



あります。熟睡しているときに第六意識(日頃の心)は眠っていますが、あなたはちゃんと支えられていたでしょう。何が支えていたのですか。アラヤ識です。そのアラヤ識はどこで働いているかというところ、五臓六腑・四肢五体、この身を場所としているというのです。この身は約六十兆の細胞か

らできており、絶えず新陳代謝して生と死を繰り返して、ほぼ半年ですべてが入れ変わるそうです。その絶えざる変化、流れの中にありながら、私たちは見事に統一され一貫性を保っています。曾我先生は「頭で考えるのではない」「四肢五体の毛穴に法蔵菩薩をひしひしと感じたのです」といふ言い方をされています。

自分が今現に生きているという事実は、その事実自身によつて証明されている。そのことを自証と言います。「法蔵菩薩はアラヤ識である」といふことは、同じように自証されているのです。私たちは今悠然と生きています。そのことに何の心配もありません。自分は今生きていないかもしれないなど心配している人はいないでしょう。それはアラヤ識に対する我々の確かな自己証明が成り立っているからです。「法蔵菩薩の実在は間違いない」。このことは、私の望外の確認でした。有りえないことが有りええました。

(私の如是我聞)
アラヤ識は、私の心の奥深いところから私を支えてくれているものと漠然と思つていましたが、今回の先生のお話で「アラヤ識は、五臓六腑・四肢五体、私のこの身を場所として、私を支えているものである。それこそが私の法蔵菩薩なんだ」と教えられました。

私はどうしても頭で考えてしまい、わが身で気づくということができません。聞法と生活の実践の中で感得していくしかないのでしょうか。先生の話は難しかったけど、「そんなどうしようもないお前を助けたいんじや」といふ法蔵菩薩のこころを話すたびに先生の目元に涙が滲んでいたのが忘れられません。ありがとうございます。

南無阿弥陀仏
南無阿彌陀仏
(聞き書き担当 釈和敬)

※注1 曾我 量深(そが りょうじん、一八七五年、一九七一年)新潟市円徳寺に、富岡量導の三男として生まれる。浄土真宗大谷派の僧侶で、仏教思想家。昭和の親鸞と呼ばれた。

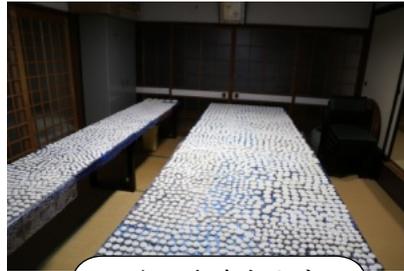
(写真でたどる報恩講)

勝福寺報恩講の様子を紹介します

1月22日から24日にかけて行われた勝福寺報恩講は、2日目が雪でしたが、たくさんの方がお参りくださいました。その報恩講を行うにあたり、19日に39人のご加勢で、御華束もち・仏具のお磨き・お掃除をしました。報恩講当日は、当番の豊川地区を中心に毎日20人以上の人が、お齋作りなどを担当してくださいました。23日のお齋の後には宇佐組・コールハイマートのコーラス、24日は小若女さんが仏法を讃嘆する腹話術を披露してくれました。法話は22日が住職、23日・24日は京都からご出講くださいました鍵主良敬先生でした。



お華束の型抜き



いくつ出来たかな？



心を込めてお磨き



四苦八苦するお華束盛り



色をつけて完成です



お浄土のハーモニー「仏教讃歌」



お煮なら、おまかせ！



今年のお味はいかがでしたか？



同朋唱和のおつとめ



小若女さんの腹話術



熱い熱い鍵主先生でした



満堂の報恩講

今年には当番ですので皆さんに呼びかけて回りました。当番は皆協力的で、初めて来たYさんも「おばちゃんに声かけてもらって良かった」と言ってくれました。皆で作って皆で食べるのが美味しいのだと思います。「ここはこうした方がいいよ」とか気軽に言い合えるといいなと思います。それにしても若い方が多くなり頼もしく感じたこととです。長年お花を立てさせてもらっていましたが、少しでも良く出来るよう一生懸命立てたお華で内陣をお飾りする、それが喜びで続けさせてもらっておりません。雪にも恵まれ、皆にぎやかにつとめた報恩講でした。

山本 佐々木ノリ子



ご門徒さん

こんにちには!

第三回

今回は、勝福寺の聞法の席でお見かけする、優しい笑顔が素敵な、後藤アヤメさんを訪問しました。

アヤメさんは現在、ご主人の幸人さんとお二人で宇佐市大塚にお住まいです。お二人は共に大分市植田の生まれで、ご主人は84歳、アヤメさんは79歳になるそうです。

アヤメさんは三歳にしてお父さんを亡くし、お母さんが一人で長女のアヤメさんを含め、三人の子供を育てたそうです。子供時代のアヤメさんは負けず嫌いの頑張り屋さんだったそうです。

笑顔の素敵なアヤメさん、近所の子供達からも「アヤメさん」と親しみを込めて呼ばれています。その理由は、豊川小学校の子供達に地域に住んでいる織物の先生として、12年間に亘り一緒に蚕を飼ったり、繭から作った糸を使ったり、機織りをしたりと数々の貴

重な時間を一緒に過ごしたので、卒業式にも来賓として招待されたそうです。

その手織りの作品を見せていただくと思像以上でした。繭から糸を紡ぎ、染めて、それを一本一本織り機に通して織っていくという気が遠くなるような作業。織り上がった作品は素晴らしく、着物は出来上がるまで一年かかったそうです。作品は道の駅などいろんな場所に展示され、販売もされていたそうです。



その機織りの技術を覚えるきっかけは、病気で入院中に以前から何か没頭できるものを探していたときに、ふと思いついたものが機織りだったそうです。その技術を習うため、あちこち聞いて回り、技術を持つている方が宇佐市の

矢部にいることを聞きつけ、習い始めたそうです。アヤメさんのこだわりは、自分で繭から糸を紡いでそれを染め、そして手織り機で織ること。その技術を習得するのに10年かかり、技術向上のため長野や京都、そして東京に通ったのは一度でなく、数度に及んだそうです。そんな活動が村おこしにつながると大分県から認められ、平松知事から表彰されました。そのときの写真を見せてもらうと、自分が織った布で仕立てた着物を着たアヤメさんがにこやかに写っていました。

「川底の石ころでありたい。どんな時でも流されずしっかりと根を張っていたい」ということです。そんな気持ちで情熱となつて機織りに邁進できたのだと思います。

そのアヤメさんを支えたのがご主人の幸人さんです。自宅の作業場を見せていただく、愛用の百年前の手織り機と糸を紡いだりするための沢

山の道具がありました。その道具の多くは、手先の器用な幸人さんが絵を見ながら作ったものでした。幸人さんの物心両面の応援があつて成し遂げられた成果だと思います。残念ながらアヤメさんは9年前から足が悪くなり、今は機織りをしていません。でも勝福寺が取り組んでいる平和の取り組み「戦争ホーキ」の材料はアヤメさんが紡いだ絹糸を使っているそうです。

アヤメさんと勝福寺のご縁は、娘さんが9年前に亡くなった際に、お葬式をお願いしたのが縁だそうです。以来、近所の方と一緒に聞法に通つておられます。

アヤメさんをよく知っている方は、アヤメさんを「自己主張が強い人ではなく、何かあると真剣に考えてくれ、力を貸してくれる頼もしい人」といいます。

そんなアヤメさんが若い世代に伝えたいことは、家族関係も含めて何でもバラバラになつてしまいがちな現代、「縁」が取り持つ出会いを大事にして欲しいということでした。

今、アヤメさんはお寺に通うことで、「『いろんな行事を通して、いろんな事を教えてくれる。ありがたい』、『私の技術を活かしてくれる。ありがたい』、『お経をあげてくれるだけでなく、みんなを迎入れてくれる。ありがたい』、『損得じゃないのが嬉しいし、ありがたい』などの幸せをいただいています」とおっしゃいました。聞いていて思わず頭が下がりました。

今回、後藤アヤメさんをお訪ねして分かったことは、その笑顔には自分の人生で好きなことを成し遂げたという成就感から発せられる笑顔だということが分かりました。そして、それが同時にアヤメさんにとつての報恩行でもあったのです。今後も長生きされて私達にその素敵な笑顔を見せ続けてください。ありがとうございます。(了)



(文責 渡辺重昭)

福島の人たちに 大分の農産物や元気を！

東日本大震災からこの三月十一日で五年が経ちます。地震や津波でたくさんの方が亡くなられ、その上、原発の事故による放射能漏れが起きました。

福島では事故から五年経った今でも土壌の除染が進まないため、住んでいた家に帰れず、今なお仮設住宅で過酷な環境の中で頑張って暮らしているたくさんの方がいらつしやいます。

せめてその方々に宇佐で出来た新鮮な野菜や果物を食べてもらおうと、勝福寺では「**福島の人たちに大分の農産物を届ける会**」をつくり、その趣旨に賛同していただいた門信徒の皆さんと毎月一回を目標に送り続け、昨年末には47回になりました。その送り先の一つ「ピーターパン学童保育所」の子供達や指導員の方からお礼の手紙が送られてきます。その一部を紹介いたします。

「朝晩がとても寒くて、私は布団から出られません。」



野菜や果物をおくつてくださり、ありがとうございます。いつもありがとうございます。「白菜はなべに使いました、かきは切って食べました」。



「指導員の先生から」と月となりました。ミカンは毎日のおやつに、レタスはマヨネーズで、大根も砂糖・酢・塩などで漬け物に、白菜・柿は各ご家庭に配布

また、農産物を届ける運動とは別に、福島原発の事故で屋外での運動や遊ぶことが制限され、ストレスが

子供達に私達ができることを！

「父兄の皆さんも料理にたくさん作って下さっている様子がうかがえます。特大松ボックリはクリスマスツリーにしてみました」。

私達はお礼の手紙や写真に元気づけられ、次回の準備に取りかかります。

※この記事を読まれて、自分も協力してみようかと思われた方がおられましたら、勝福寺までご連絡下さい。

また、農産物を届ける運動とは別に、福島原発の事故で屋外での運動や遊ぶことが制限され、ストレスが



たまった子供達に、夏休みの期間を利用して大分でストレスを少しでも解消してもらおうと、**湯布院に一週間、招待する「ゆふわく」**を平成二十三年から毎年実施しています。

「ゆふわく」は県内から集まった多くの人で結成された実行委員会によって運営されていますが、勝福寺からもカンパやスタッフとして参加しています。昨年も三十数名の子供達を招待することができました。到着した時の子供達の不安げな顔が、別れの時には離れがたくて涙でくしゃく



富貴野の滝で、滝遊び

しゃの顔になってまた福島に帰っていきます。その活動の様子も紹介します。※ 今年もまた「ゆふわく」をしますので、皆様のご協力をお願いします。

また勝福寺では、お寺の子供会、「**たんぼぼ**ども会」を夏休み、冬休み、春休みに年三回行っています。門信徒さんの子供さんやお孫さんにスタンプが自分の特技を生かした工作等の指導と、ゲームや肝試しなどの体験活動を通して、子供の時からお寺を身近に感じてもらうように取り組んでいます。

今年の春は宇佐組と一緒にいきます。皆さん、来てね！



今年の報恩講は、雪に荘厳された忘れがたい報恩講になりました。寒さも厳しく、どうなるかと心配しましたが、たくさんの方がお参りくださり、一緒に報恩講を勤めることができました。

「報謝(報恩謝徳)の日」があります。町のスーパーでも「報謝デー」をしています。どちらもご恩返しという意味があるのでしよう。

「い貧しいものになるよ」と問いかけています。この身を生き育てて下さった父母の恩、自然(動植物・天地)の恩、社会の恩、そしてこのかけがえのない人生を尊び安んじて生き死にする道を教えて下さる仏様のご恩。ご恩の中に生かされていることを思い出させて下さるのが報恩講のおつとまりです。

真宗門徒のまめ知識



「報謝(報恩謝徳)」にはどんな意味があるのでしょうか? 婦人会には月一度

しかし仏様は「自分は善いことをしていると思っていけるけれど、ご恩が見えてくれないか」と、「ご恩がわからない」と、人生はさびし

冷剤の代用品になりますし、野菜を包むと長持ちします。牛乳パックは冷凍用の保存パックになり、切り開くと魚などを切るまな板になります。中に新聞紙を入れて廃油を捨てることもできます。

地球を大事にエコ生活

私は田舎で育ったからかも知れませんが、自然の中で生きていくのが大好きで、春になると土筆、わらび、ぜんまい等々、夏はマダケ、秋は山のキノコ採りに明けくれています。その中で最近の異常気象が気になります。

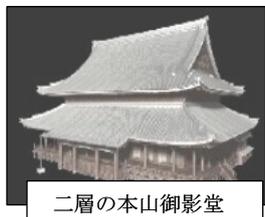
イみたいに涼しくすごせます。冬の風呂のお湯の保温に新聞紙を拡げると保温と汚れ取りの一石二鳥です。又小さく切り、水で濡らし袋に入れ冷凍庫に入れると保

「御許騒動」といいます。しかし、門信徒の強い思いで九年後の一八八〇年に大修復工事とはいえ、実質再建された建物が今の「四日市別院本堂」です。

御遠忌法要一口メモ 別院の歴史

九州最大級の木造建築「四日市別院本堂」が百三十六年ぶりの大修復工事を終え、四月には御遠忌法要が行われます。

この修復工事の原因となった出来事を簡単に紹介します。



二層の本山御影堂

「編集後記」 今回の「ひびき」は勝福寺報恩講を中心に編集しました。二日目は雪にも関わらず、たくさんの方のお参りをいただきました。

法話は京都から83歳になるご高齢の鍵主先生をお招きして、二日間で八時間に亘るお話を一ページに収まるように、しかも内容は出来るだけ分かりやすくまとめてくれと無茶なお願いを渡辺和義さんにしました。先生の思いを、お寺でお聞きになった方には思い出しただきたいし、聞けなかつた方には少しでもその内容を伝えられれば幸いです。

加えて、報恩講は前日までの準備や当日のお世話などたくさんの方々を支えられて行われています。その様子なども紹介しています。

渡辺 重昭